

研究会通信

第 27 号 平成 16 年 11 月 1 日
特定非営利活動法人教育研究所・不登校問題研究会
〒233-0013 横浜市港南区丸山台2-26-20
TEL 045-848-3761 代 Fax 045-848-3742
http://kyoken.org/

今年は度重なる台風、そして中越地震と大変な 1 年となりました。多くの被災された方々には心からお悔やみ申し上げます。また一刻も早い復興を心よりお祈り致しております。



平成 16 年度夏期セミナー第 14 回 教師&専門家のための不登校問題研究会 講★義★概★要★&アンケートより

大阪・東京 2 会場にわたって行われた研修会、講座の概要と皆様のアンケートの一部をご紹介します。

◆「今、子ども達のおかれている状況をどう捉えるか」ー未来ある日本のために社会学者森田洋司は考えるー

大阪樟蔭女子大学人間科学部教授 森田 洋司
大阪府岸和田で起きた児童虐待のケースは学校現場では不登校の問題であった。しかし裏には虐待の問題が隠れていた。当事者の担任教師は不登校の見地においては非常に粘り強くがんばった。何度も家庭に出向いていった。しかし、教師は本人とかかわることはできなかった。そのかわりの中で教師は疲れ自信をなくしていく。

この問題の教訓は不登校という現象面のうらに色々な問題が潜んでいることが伺える。様々な問題がそれぞれに重なりあう状況、(マルチプログラム) そういう時代に入ってきているという。

このように、“いじめ” “不登校” “非行” “虐待” など様々な問題が重なり合う時、果たして学校だけの対応が可能なのであろうか。情報化が進む今の時代、地域、家庭、学校が連携する「複眼的視点」が必要ではないだろうか。その連携の質は情報連携から行動連携が必要な時代になっている。

平成 12 年ごろから起こり始めた問題行動(黒磯事件など)は前歴、補導歴のない子どもが起こす「いきなり型」になってきた。しかし、どこかに前兆、予兆はあるはずである。それをどうアンテナに引っ掛けるか。情報連携ばかりでなく、行動連携にどうつなげていくか。それが大きな課題である…。

講義の中では行動連携の基本的な考え方を具体的な例を挙げて紹介していきます。明快な「森田節」が冴え渡ります。

来年の日程が決定しました。

平成 17 年度夏期セミナー開催のご案内
☆大阪会場 (よみうり文化ホール)
平成 17 年 7 月 27(水)・28(木)・29(金)
☆東京会場 (国立オリンピック記念青少年総合センター)
平成 17 年 8 月 22 日(月) から 8 月 26 日(金)

〈アンケートより〉

- ◇ 不登校という今ある状態から未来に向けての支援、取組が大切というお話は私にとって新鮮でハッとさせられるものでした。どうして学校に行けないのかとそればかり考えて子どもに接していたように思います。自己否定感を少しずつ変えることには、こちらのエネルギーが充実していなければできないと思うのですが、子どもの未来のために頑張ってみようと思います。
- ◇ 不登校生に何らかの配慮をして卒業させたとして、はたして社会で生きていけるのか? という疑問は常に抱いています。だからといってずっと学校にとどまらせるのもおかしいと思います。どうしたらいいのか、わからないことだらけです。私立学校は公立並の充実した援助チームを作っていこうにも「人が集まらない」「金がない」ということばかりでなかなかうまくできません。
- ◇ 不登校の抱える問題の複雑さ、広域化など、普段あまり考えていなかったことについて考える良い機会となった。専門家グループなど、より多くの人を巻き込んだ対応の有効性について学ぶ機会ともなったが、現実グループを立ち上げることは難しそうに感じる、まずは、地域の人材について調べてみたいと感じた。

◆「不登校とストレス」

南山大学教授 精神科医 梅垣 弘

現代のストレスはコントロールの難しい心理社会的ストレスによるものが多く、現代における子ども達のストレスも心理社会的な事象と強く関係している点が多い。

子ども達の周りで起こる様々な出来事や体験が自分にとって嫌だと感じ、それに自分自身が対処できないと考えた時、それはストレスとなる。それに対して個人の特性の上に周囲からの支援(ソーシャルサポート)を受け、気分転換や、発散等の本人による対処行動が適切であればストレス反応は起こらない。しかし、不適切な場合、それはストレス反応として表出してしまう。

このようなストレス理論から不登校を考えると児童生徒が学校場面を嫌だと感じ(ストレス)その不快感を避けるために生じるもの(ストレ

ス反応)が不登校ということになる…。

ストレス理論から不登校問題を捉えていきます。臨床事例を交えながら梅垣先生独特の優しい口調で「不登校とストレス問題」を丁寧に解説していきます。

〈アンケートより〉

- ◇ たくさんの事例をあげての講演でした。ストレスはたくさん存在しているがそのストレスをどう対処し、自分を高め好転させていくかという耐性力のような心の強さを長いスパンで子育てしていく社会になっているとつくづく思いました。
- ◇ ストレスとは、本人によって受け取り方が異なり、A児にはなんでもないことがB児にはとても重く感じられるということ、30人以上いる学級の子をまとめていくのに、誰でも、同じようにはできないということです。一斉指導の中で行うしかない今の学校ではどこでも、誰でも、ストレスをためる可能性があるということでしょう。せめて1クラスの人数が少なかったら…とも思いました。
- ◇ ストレスという言葉でまとめてしまうが、ストレス、ストレス反応があることが分かった。ストレスをどう回避していくか、何が本人のストレスになっているかを見極めることはとても難しいと思いました。ストレスに耐えうる子を育てるにはどうしたらよいかまた勉強したいです。

◆「教師のための学校危機対応実践プラン」

兵庫教育大学教授
兵庫県立心の教育総合センター所長(兼任)
上地 安昭

「学校は安全でなければならない。」

本来安全な心の拠りどころでなくてはならない学校において危険な事故や事件の発生が年々増加している傾向にある。子ども達にとって学校を心の拠りどころにするために、学校の安全を実現するためにどう対処すべきだろうか。

“危機的場面”とは何年も同じ状況が続くものではない。しかし、教師個人が通常の手段では対処する方法を持たないのが危機的場面である。また、見方を変えると“危機”は一つの境界でもある。これを乗り越えることによって事態は良い方向に転換することも少なくない。

これからの社会では大人サイドの危機管理だけではなく子ども主体の危機教育を徹底的に行っていかなければならない…。

心の拠りどころとなるべき安全な学校づくりに向けて、データを提示しながら、危機対応の実践

プランを具体的に詳しく解説していきます。

〈アンケートより〉

- ◇ 学校が安全な場所であるためには、もっと教師側も危機について意識するべきだと思った。外部からの侵入者はもちろんだが、佐世保のような事件については予想外だったので、考えていきたい。
- ◇ 過去にあった自校の学校危機の事例を思い浮かべながら傾聴した。そのときにこのようなプランがあったなら、学校もそれほど混乱しなかったらと思うと今になって思えます。
- ◇ 学校は大きな地震の発生が予想されている地域にあり、いざという時どうするという話が出ています。しかし、本当にそれが起きたらどうしようと思うばかりで、具体的には訓練とおさなりの準備以外できないのが現実です。自分の、そして生徒たちの命を守ることができるのか不安です。

◆「子どもを救う教育相談」ーピアプレッシャーをピアサポートにー

奈良教育大学助教授 池島 徳大

学校の教員の守備範囲は広い。一次的教育援助サービス(すべての子どもが対象)から二次的教育援助サービス(一部の登校しぶりの子ども、非行化傾向の見え始めた子ども、学習意欲が低下し、援助が必要な子ども等)、三次的教育援助サービス(不登校、ADHD、アスペルガー等)を必要とする子ども達まで広い範囲でフォローしなくてはならない。さらに三次的サービスを必要とする子どものケアは個別対応が必要となり教員の負担は大きい。

三次的教育サービスを必要とする子ども達は成長エネルギーが枯渇している。そこにストレスがのしかかる。さらに重たい心の扉を持つ。この心の扉は年齢を重ね、子ども自身の中に自尊感情が増加すればするほど厚く重たいものになっていく。またさらに仲間の圧力(ピアプレッシャー)がかかり更なる重さとなる。この心の扉をいかに開けるかが教育相談の重要なポイントである…。

ピア…いわゆる仲間の力、友人の力を学校教育に生かしていくという、ピアサポート活動に触れながら、子ども達が感じているピアプレッシャーとはいったいどういうことなのか。講演の中では会場とのコミュニケーションを適宜取りながらユーモアを交えて分かりやすく解説していきます。

〈アンケートより〉

- ◇ また、お話を伺いたいと思った。ピアプレッシャーがいかに重大なことか、また教員に大

切な4つの資質、これからの職務に心して頑張っていきたい。

- ◇ ピアサポートについては私の学校では昨年から「心の研修と体験学習」という名目で実施しており、ある特定の期間だけ行うのではなく、日常の学校生活の中に取り入れようと思いました。(本校では学校を縦割りにして3年をリーダーにしています)
- ◇ 子どもの心を理解することからはじめればその後の様子も変わってくるんだろうと、改めて思いました。私は不登校の子や特殊学級の生徒とかかわる相談員をしていますが、教師を目指している立場でもあります。色々な意味で今日のお話を活かしていきたいと思えます。

◆「母子関係改善のカウンセリング」—教師はそれをどう支えれば良いか—

皇學館大學名誉教授

心理社会療法研究所長 黒川 昭登

不登校ケースを取り上げてみると、不登校とはいえ、3時限目から、とか、保健室には来られる、特定の教科のみ教室に入れられない、という軽度なものもあるし、中には、家から一歩も外には出られない、とか、登校しようとするとうるさく吐き気、頭痛、腹痛に悩まされるという場合や、昼夜逆転で、朝になると眠ってしまい、起きようとしても手足がバラバラになったようで起き上がれない、とか、中には、脅迫障害が伴い、1時間も手を洗う、とか、軽い妄想があり、クラスの子が共謀して自分を排斥しようとしているといった子がいる。

これら重症のケースは、はっきり「不潔恐怖症」とか「被害妄想」という病名をつけて、不登校と区分して考えようとするが、われわれは、これらの症状も不登校と同種の起源によって起こっている、と考えている。というのは、不登校の子の治療と同じ手(母子関係の改善)を施せば、改善するからである…。

母親は不登校の子どもにどうかかわるべきか、また子どもと向き合う親を教師はどのように支えるべきか、長い臨床経験から母子関係の改善が不登校解決への手がかりであるとする黒川先生のじっくり聞かせる講演です。

〈アンケートより〉

- ◇ 人間の内面にしみついている家の価値観やしつけがその人自身の行動によくも悪くも影響を受けることは現場で感じていました。自分の原点に戻るようなカウンセリングがその後の対応のあり方を考えていく上で大切だと思いました。自分らしく生きるとは何

だろう?と考えさせられました。

- ◇ 自分では考え付かない理論でした。体からのメッセージ、それは熱意という言葉になるのでしょうか。自分の取り組む姿勢を見直す機会になりました。
- ◇ 先生の実践を取り入れたお話で、特に面接場面のお話にはなるほどと思いました。母子関係と不登校は強い結びつきがあると、不登校でなくても不安定なこの背景にはほとんど、お母さんとの間に十分甘えたという状況がないように思います。身体症状を訴えて保健室に来る子は話をきくこととできるだけスキップを心がけています。

◆「ネット依存/新しいひきこもりへの対応」

—不登校の子ども達の不安の質の変化にどう対応するか—

特定非営利活動法人 教育研究所 理事長
不登校問題研究会 幹事 牟田 武生

佐世保で起きた事件、佐賀のバスジャック事件はネット世界との接点の一つの鍵を握っていた。ネット社会は大人よりむしろ子どもの世界の方がより進み、広がりも持っている。この不可視空間の世界、その仮想社会の中で子ども達は癒され、時には傷つき、大人の知らぬ間にトラブルに巻き込まれている。

不登校の現場でも仮想現実の世界にひきこもる子ども達は多い。受容中心の対応が叫ばれた1995年から1998年頃(不登校10万に突破の時代)、不登校は急激に増加する。情緒的には安定でも不安定でもないが、人間関係には消極的であるという、ごく普通の子ども達が不登校になっていった。学校では人間関係をめぐる些細なトラブルが原因で不登校になるが、心には大きな不安は無い。学校に行かないことで退屈感やさびしさ、つまらなさは募っていく。しかし現実の人間関係には活路を見出すことはできない。そんな子ども達がチャット、メール、オンラインゲームへのめりこんでいった。そしてネットの世界という仮想現実の中に居場所を見出し依存していくことになる…。

ネットゲームという仮想現実の世界に心の居場所を見出し、見捨てられ不安からその世界に依存していくという新しいタイプのひきこもりが現れてきた。牟田先生が最先端の臨床現場で今直面している生の問題に焦点を当てていきます。

〈アンケートより〉

- ◇ 新しいタイプの不登校について分かりやすく教えていただけてよかったです。本校もそれに近い事例があるので、早速、対応していきたいと思えました。
- ◇ 環境の変化と共に生徒も変化し、我々は常に

対症療法しかできないことが非常に辛い、根本的な解決方法があればいいのだが、特効薬はないが、取り組む基本姿勢が判ったことが良かった。

- ◇ 私が相談員としてかかわっている生徒にもインターネットに夢中になっている子が多いです。子どもとインターネットのどんなサイトを見ているのか聞いても、私が見分らない部分もあり、その話題は長く続きませんでした。今日のお話を聞いて、私自身が生徒の心を理解するために、一緒にサイトを見て行動すると生徒との距離が近づくのではないかと感じました。ありがとうございました。

◆「ADHDの理解と支援」

一園・学校における対応—
国立特殊教育総合研究所

教育支援研究部統括主任研究官 花輪 敏男

軽度発達障害というのは知的な障害がない、あったとしても軽い発達障害をいう。知的障害が無いために、その子ども達は通常学級に通っているわけである。文部科学省と国立特殊教育総合研究所の合同調査では、このような軽度発達障害の疑いのある子どもが、通常学級に現在 6.3%いるという結果が出てきた。現在、特殊教育の対象者は 1.5%である。この数字が示しているのは根本的に仕組みを作り直す必要に迫られているということを表している。

これまで、この軽度発達障害に対しては何の対応もされてこなかった。決して最近起きてきた問題ではないが、これまでは問題化されてこなかったのである。しかし、LD・ADHD・高機能自閉症・アスペルガーといった問題は脳の働きによってこのような行動を取らざるをえないということを知っておかなくてはならない。

また学校現場においては多くのケースが LD と ADHD が混在している。さらには ODD(反抗挑戦性障害)CD(行為障害)との混在するケースさえ現れてきた。これからは医療・福祉との連携ばかりでなく司法との連携も必要となってくる時代である…。

この問題の研究に早くから着手してきた花輪先生が ADHD・LD を含めた軽度発達障害とは何か、教員として、保育士として現場でどのようにかかわればよいか、関係機関、保護者との連携について具体的に分かりやすく解説していきます。

〈アンケートより〉

- ◇ よくわかります。しかし、30人を受け持ち、学級数は2つ。研究(体育)も進めながら、あらゆることを(キャンプなど)こなしている毎日です。一人のADHD(かなり手がかか

ります。正直なところ)児にこれ以上は無理かもしれません。ダウン寸前です。

- ◇ 高校にもLD・ADHD・アスペの生徒が入ってきています。それなりの知能もあり、多動もおさまっているから入ってこられるわけで最初はかくされているケースがあります。注意してみる必要を感じる今日この頃です。
- ◇ お話はあちこちにちりばめられた具体例がとても身近なものでわかりやすかったです。こどもにとって受け入れやすい、わかりやすい方法を探すこと、それを徹底して(例外なしに)生活の中で用いていくことを心がけていきたいと思います。

◆「人と人をつなぐカウンセリング」

一対人関係ゲームと認知行動カウンセリングへの誘い—

筑波大学教授 田上 不二夫

学業や人間関係の失敗体験(マイナス感情)が学校生活への不安を引き起こし、回避行動につながっていく子ども達、彼らに対する対応は、失敗体験なしにうまくいく状況で再学習をさせていくことである。

罰は適切な行動を学習させる力は持たない。罰による効果は回避することを覚えるだけである。人が変わっていくには評価される必要がある。認められる、うまくいくことで人間の行動は変わっていく。年に数回程度でも認められた体験があれば報われていくのである。

しかし現代の挫折する青少年には価値のトライアングルにおいては社会的パワー(ただひたすら人に勝つため、競争に勝つために力をかける)に特化している傾向が見える。ただ気の合う少数の仲間とだけ人間関係を作り、広げようとしない。人と積極的にかかわって、失敗しても良いからやってみようという気持ちはなかなか待てない。対人関係ゲームでは活動を楽しみ、人と共に楽しむということを育むことを目標にしている…。

認知行動療法の原理を踏まえ、不登校の子ども達の心理アセスメントから支援の実際までを解説、さらに人間関係が広がるための対人関係ゲームを段階的に紹介していきます。田上先生の講座では会場の参加者も一緒に対人関係ゲームを体験し楽しく、分かりやすく学んでいきます。

〈アンケートより〉

- ◇ 遊びを通しての人との係わり合いづくりは確かに効果があると思われます。一緒にやらせなくても見ていれば、やがてみなと一緒にという気持ちができるだろうと思います。しかし、そこへ参加を拒む、逃避傾向の

ある子どもへのアプローチが問題点と
思っています。(土俵への登らせ方)

- ◇ 一方的な講義の多い中(失礼)の、いきなり会場の参加者でのゲームで、とても新鮮な気持ちになりました。私自身、田舎から参加して、周囲に知る人もいない、500人ほどの会場内で、一時的に「不登校生徒の気持ち」「対人関係に困難さを持ったこの気持ち」ってこういう状態なのだろうと実感しました。
- ◇ ゲームで動けたのがよかった。事例を含めながら話をしてくださったので聞きやすかった。スキル獲得は大切だが、それだけではダメなので、教科との融合が難しい。また、事前・スキル・事後という扱いのパターンが知りたかった。

◆「難しい、親とのかかわりの方法」

早稲田大学教授 菅野 純

子どもの教育は親抜きには語れなくなっている。子どもとの関係が良くても親との関係が悪ければ引き裂かれてしまう。子どもとのかかわりを深めていくためにも親との関係作りが大切である。

最近の親の中には非常にコミュニケーションが取り難い親たちが増えてきた。“幼さのある親” “子どもを咎められない親” “子どもと同じレベルでしか考えられない親” “育児や子どもそのものに対する知識が少ない親”、競争社会の中にどっぷり浸かり、遊び体験の少ない人たち、また自らが不登校を経験してきた人たち、さらには校内暴力の時代に子ども時代を過ごした人たちの世代が親になってきている。学校や教師に対してあまり良い感情を抱いていない人たちも多い。

保護者、親が多様化してきている。親の存在が子どもの教育に大きな影響を与えるということが、対応する先生方にとっては難しいと感じるところなのではないだろうか…。

昨年に続いて親と面接するときの心得、教師としての心構えを最近の具体的な事例を挙げながら分かりやすく解説していきます。菅野先生のユーモアたっぷりの表現は会場を和ませ、あっというまの110分です。

〈アンケートより〉

- ◇ 対応の難しい親の内面“そうならざるおえない何かがある”“心のゆとりがない”から攻撃的になってしまう。そんな時の対応の仕方、たくさんの事例や経験からくる言葉には、そうかと納得するものが多くありました。
- ◇ 菅野先生の話術に今の親とのかかわりの具体的方法が理解できました。未学習と3回唱えてから向社会的な行動へつないでいく菅野先生のお話…。正論は優先順位の3から4

番目がよいということ等、これから心に唱えたいと思いました。

- ◇ 昨年に引き続き菅野先生のお会いしたくて参加しました。先生の取り組まれている姿勢には人としての暖かさを感じます。かわり続けることの大切さと、人への寛容さを失わず接していくとき、本当に真心が伝わっていくのだと思いました。

◆「ADHDの理解と支援」

—医学から見たADHD—

国立特殊教育総合研究所教育支援研究部
総合研究官 精神科医 渥美 義賢

ADHDの子ども達は周囲からは困った子どもと思われている一方、子ども達自身は非常に辛い思いをしている。自身を語らないこともあって、一層周囲の理解を得られないことが多い。このようなADHD児本人の思いと、周囲の見る目とのギャップが悪循環となって、ADHD児における行動上の問題や学習の遅れを一層大きなものになっている。保護者自身も、子どもが家庭の秩序を乱すことが多く、子ども自身の本当の気持ちを知りそれを理解しようとする余裕を失ってしまっていることが多い。

ADHDは障害である。不注意、多動、衝動性を主症状とし、それらは脳の何らかの機能障害によっておきてくる障害と考えられている。自分の意思だけでその症状をコントロールすることは難しいが、適切な支援をうけることでADHDの行動もかなり改善が期待できる。ADHDは発達障害の中では、対応が適切であれば、かなり予後が良いことも多く、また行動面においては比較的短期間で改善する可能性を持っている…。

ADHDを含む軽度発達障害について医学的見地から焦点を当てていきます。ADHDと合併しやすい障害の紹介、ADHDの経過と予後、医学的治療についても詳しく解説していきます。レジュメも詳しくADHD理解のための必修講座です。

〈アンケートより〉

- ◇ AD/HDについてよりODDやCDについてもう少し突っ込んで話して欲しかった。昨年この研修でAD/HDの支援をきちんとしないとODDやCDに発展していくことがあると聞き、ショックを受けました。そのあたりについて詳しく話せるのは渥美先生しかいません。来年期待しています。
- ◇ 障害の根本が変わらないこと、そのために周りの支援の大切さが分かりました。また色々な分類があることも分かりました。最後に行った演習が校内でもできるといいなと思いました。小学校1年生を担当して入

学後3日目、突然出現したADHDと思われる児童、暴れて学級をかき乱し、どう対応したらよいか大変困りました。質問にも的確に答えていただき、ありがとうございました。担任自身と学校全体の対応の取組を見直したいと思います。

- ◇ 「ADHD」の疑いのある子ども達を専科として(習字)を指導しております。学校ではまだまだ管理職はじめ「ADHD」などへの理解、援助が乏しく悪戦苦闘していますが、どのようにとらえどのように指導してゆけばよいかがよくわかりました。参考にして2学期から気持ちを切り替えて頑張ります。

◆「LD・ADHDと呼ばれる子ども達」—新しい特別支援教育活動の展開—

東京学芸大学教授 日本LD学会会長 上野一彦
第一次世界大戦後、脳の研究はかなり進んできた。それと同時に子どもの中にも行動的にみて、脳の問題ではないかと思われるケースが見られてきた。軽い脳の問題を感じさせる子ども達をMBD(1950年大から60年代の医学用語)と呼ぶようになる。1963年、アメリカでは重度の発達障害から軽度の発達障害に関心が移っていった。その時、それまでの概念や言葉には当てはまらないが、部分的にできることやできないことがある子ども達のことをLD(ラーニング ディスアビリティ)と呼ばれるようになる。そしてLDという概念が一気に全米に広がっていった。

1975年にはアメリカ政府は教育の中で障害としてはっきり認識された。一方、多動については一時忘れられていたが、1990年ごろから、アメリカを中心にこの多動という問題が教育の中で目立ってきた…。

軽度発達障害といわれる子ども達とは何か、世界の認識と日本の認識の違い、どんな指導が有効なのか、さらにはこれからの課題に至るまで、LD・ADHDと呼ばれる子ども達の特別支援教育活動の展開を解説していきます。

〈アンケートより〉

- ◇ 近年の動向を詳しく説明していただけてよくわかった。養護学校の教員としてもっと専門性をみにつけなければならぬと思った。自分にはアセスメントの技術がないと感じたので今後研修に参加して身につけたいと思った。
- ◇ 特別支援教育の流れがよく分かりました。担任一人で抱え込まなくてよくなりそうという見通しがもてました。ただすぐには無理のようです。それまでに体がもつとよい

のですが。

- ◇ 特別支援教育がどういう方向へいくのかという見通しが少し持てて安心しました。パニックになっていた部分があった。

◆「不登校にしない幼児期の配慮、問題行動の直し方」—親子の関わり・幼児教育の本質・問題行動を防止する—

国際学院埼玉短期大学教授 金子 保
文部省(当時)の不登校対策委員になり、原案作成の責任者にもなった。しかし、不登校は減らなかった。調査の結果、幼児期に不登校の原因と思われるものがたくさんあることが分かってきた。

子ども達は、どうしてこうも変わってきたのだろうか。最近、LD、ADHD、アスペルガー、高機能自閉症など軽度発達障害といわれるケースも多く見られるようになってきた。そしてそれらは脳の障害であるという。しかし、脳の障害だからそれは治らないのか。脳の障害であるということ覆そうというのではない。学習障害にしても本当の意味での学習障害のケースと学習障害的な症状を見せているケースがある。後者の場合“経験欠落”という視点も必要なのではないだろうか。

子どもの変質の原因には育児環境の変化があげられる。エンゼルプランにより保育時間は長くなったが、その分、家庭でのコミュニケーション時間は少なくなっている。地域にあった情報交換、相談機能も失われつつある。幼児期のかかわりをもう一度見直しながら小中学生期の問題行動の予防について考えてみたい…。

小中学生期に起こる様々な問題行動を予防するためには幼児期にどのような配慮、かかわりが必要なのか、それぞれの問題行動に対する具体的なアプローチの仕方、指導方法を分かりやすく解説していく。金子先生独特の口調は聞いているものをどんどん金子ワールドへと引き込んでいきます。

〈アンケートより〉

- ◇ 幼児期の大切さをつくづく感じました。自分の子育ての経験を重ねるところや思い出されることが多くて楽しいお話でした。でも高校生を相手にしている私にとってどうしたらよいのか…。何か少しでもヒントがあれば…。
- ◇ 自閉性のある子について3歳ごろまで早めに笑わせると劇的に情緒が発達するというお話が一番心に残りました。ややマイクを離れたやさしい話され方が心地よく…。いいお話だと思いながらウトウトしそうになりました。(すいません。)
- ◇ LD的、ADHD的、自閉的は乳幼児期の育

て方と因果関係があるということは漠然と感じていましたが、多くの臨床の結果の分析でよく理解できました。また、不登校から再登校までの指導のプログラムは大変参考になりました。赤ちゃんのときに「笑う」ことの重要性も再認識できました。

◆「不登校・ひきこもり・出社拒否」—概念・実態・対応についての実証的研究より—

北の丸クリニック所長

(社)青少年健康センター常任理事 倉本英彦

ひきこもりと不登校の関係は非常に深い。ひきこもりの方の不登校経験は約4割であるという調査結果が出ている。しかし、臨床場面で見れば6割から7割になるのではないかと感じる。学生時代に不登校経験がないケースでもひきこもりはある。しかし、不登校の特色ときわめて類似しているといえる。潜在的に不登校になってもおかしくなかったような人が20歳を過ぎて何か適応に躓いて、ひきこもりになったというケースが多く見られるのである。不登校とひきこもりというのは本質的に同じ現象である。

ひきこもりへの対応は医療、保険、心理、教育、福祉などの多職種・多施設間の連携協力なしにはなし得ない…。

臨床精神科医である倉本先生が最先端のひきこもり事情を踏まえ、豊富なレジュメをもとに社団法人青少年健康センターにおける臨床的実践活動を紹介していきます。

〈アンケートより〉

- ◇ 官には、ひきこもりの問題に対応できる窓口が無いので、親御さんの苦悩の深さが思いやられる。そんな中で、グループ活動を通して少しずつ社会との接点を作り、他者との絆を太いものにしていこうとする民間の地道な営みには頭が下がった。
- ◇ 不登校もひきこもりも状態像を示す言語であって、その原因が病気からくるものか、環境から来るのか、見出すまでにとっても時間を要するものだと思います。やはり、学校のみで解決できるものは少なく、教育センターや相談員の方との連携がこれからますます重要となってくると考えました。
- ◇ 不登校、ひきこもりなどについてドクターのお立場からお話、興味深く拝聴させていただきました。センターの活動内容で、“ハウス”や“クラブ”や“社会参加支援活動”“相談的家庭教師”などがあることをはじめ知りました。私自身、大学時代、教員になってからも不登校、出社拒否などを経験しましたので悩める人達のためにも先生

のご活躍を祈念いたします。

◆シンポジウム 「不登校・その時、どう対応するか」NHK 週刊こどもニュースキャスター 池上彰・パネラー 不登校体験者&保護者

毎年恒例の体験者の生の声を聞く講座です。今回は体験者と共に、親として子どもを見守った親の方にもパネラーとして参加いただき、親、子両面からお話を聞いていきます。池上キャスターの巧みなりードでお話は深まってきます。

〈アンケートより〉

- ◇ 我実体験に基づいた話なのでとても勉強になった。本人達の気持ちや親の気持ちは、こんな感じだということを知ることができてよかった。Nさんの言うような手を握ってあげたり、悩みを聞いてあげたりするような心遣いのできる先生になりたいと思った。
- ◇ 校内での不登校の方の「親の会」を年3回以上開いていますが、さらに呼びかけてその和を広げたり、つながりをもっと深まるような工夫をしていこうと改めて思いました。色々な体験談を話していただき、本当にありがとうございました。池上さん、このように聞いていけば話が深まっていくというよい聞き方、聞き出し方を見せていただきました。(中学校内の相談窓口をしています。)
- ◇ 池上さんのコーディネートはたくみで、4名のパネラーの方々から本音を聞かせていただき、とても有意義な時間を持つことができました。その時その時の苦しみ、そしてそこを回避せず、もがきながら一つ一つ問題点を取り組んできた過程は私の今の仕事に対してとても参考になりました。元気をもらったことは、つまりそれは寄り添うこと、共感、共苦の精神なのですね。

※アンケート紹介はホームページでも行っていきます。是非ご覧ください！(<http://kyoken.org/>)

★**スクールカウンセラーへのスーパーバイズ
研修を始めます★**

10人前後のスクールカウンセラーのグループを作り、臨床事例を共有しながら、スーパーバイザー(牟田武生)がアドバイスをを行い、スクールカウンセラーの力量をアップしていくことを目的にします。

10月から平成17年9月まで、月一回、**スクールカウンセラー「スーパーバイズ」研修**を全12回で行います。

日程：12月18日、1月15日、2月19日、3月12日の各土曜日の午後3時から5時まで ※現在

日程が確定しているのは3月まで。4月以降は
随時決めていきます。
興味のある方は是非お問い合わせください。
(NPO 法人教育研究所)

☆日本全国から多くの方々にご参加頂きました。

◆都道府県別の参加者内訳

☆第14回教師&専門家のための

不登校問題研修会 収支報告

①受講料 (有料 1145名) ¥16,278,000

秋田	5	岐阜	6	愛媛	5
青森	4	三重	6	福岡	13
岩手	5	滋賀	0	佐賀	5
北海道	6	大阪	64	長崎	10
東京	156	京都	34	熊本	3
神奈川	93	奈良	10	大分	5
千葉	74	和歌山	6	宮崎	3
茨城	60	兵庫	19	鹿児島	7
栃木	25	鳥取	14	沖縄	9
埼玉	68	岡山	37	福井	10
群馬	29	広島	34	石川	13
長野	9	山口	9	富山	6
山梨	11	香川	4	新潟	21
静岡	39	徳島	0	福島	10
愛知	82	高知	17	宮城	8
山形	6	島根	4		

②平成16年度決算終了後活動費 ¥200,000

③平成16年度パンフレット作成費 ¥500,000

④平成16年度DM発送費 ¥2,000,000

③前年度繰越金 ¥3,000,551

合計 ¥21,978,551

① ホール借料 (機材借料、技術者料含む)	¥1,669,857
② 講師お礼 (111,111円×19・ 10,000円×4) (源泉含む)	¥2,151,109
③ 講師交通費 (5,000円×7、15,000 円×1、35,000円×4、10,000円× 1、3,000円×6、7,000円×1、25,000 円×1)	¥250,000
④ スタッフ用役費	¥3,294,000
⑤ ボランティア交通費	¥662,096
⑥ 食事代 (講師・ボランティア昼食、 打ち合わせ費用含む)	¥374,000
⑦ スタッフ宿泊費	¥556,570
⑧ 郵送費	¥3,243,182
⑨ 印刷費	
パンフレット	¥566,000
封筒	¥391,722
講義ノート	¥2,078,590
他印刷物 (受講証他)	¥438,890

ラベル出力・名簿管理	¥421,672
⑩ 雑費	¥220,114
⑪ 事務用品費	¥795,618
⑫ 事務諸経費 (電話代等)	¥360,000
⑬ 支払い手数料	¥56,375
⑭ 第14回研修会参加者への報告及 び研究会通信発送費	¥250,000
⑮ 決算終了後の活動費 (交通費・電 話代等)	¥200,000
⑯ 次年度発送費	¥2,000,000
⑰ 次年度パンフレット作成費	¥500,000
⑱ 次年度準備金	¥1,498,756
合計	¥21,978,551

☆第14回 全参加者数

内訳

大阪会場参加者 309名

東京会場参加者 836名

両会場参加者 17名 招待者 10名

参加者内訳

小学校 361名 中学校 241名 高等学校 128名

(中高併設学校については中学で登録)

養護学校 35名 大学職員 4名

教育委員会(教育センター・適応指導教室・教
育研究所含む) 36名

児童相談所 5名 保育園 84名 幼稚園 129名

その他(他の教育機関・施設などを含む) 82名

学生 23名

※両会場参加者が17名いるため、参加者内訳の
合計と全参加者数が異なります。

『すぐ教育実践に使えるカウンセリング&ケ
ースワーク研修会』開催見送りについてのお詫び

今冬、富山県宇奈月温泉「ホテルニューオオタ
ニリゾート」にて開催を予定してまいりました平
成16年度冬期セミナー教師&専門家のための『す
ぐ教育実践に使えるカウンセリング&ケ
ースワーク研修会』は誠に残念ではございますが、今年
度は開催見送りとなりました。

7月1日付けで、文部科学省に申請してありま
した冬期セミナーの後援名義の使用許可が、冬期
の研修会については実績不足(初回開催)という
理由から、9月16日に見送りが決定しました。その
ため予定していた、文部科学省の後援名義の基に
行う予定であった市町村教育委員会を經由して
の学校への告知が困難となり、開催見送りを余儀
なくせざるを得なくなりました。

お問い合わせ、またお申し込み頂きました皆様
には大変ご迷惑をおかけいたしました。心よりお
詫び申し上げます。